

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①市学習状況調査の結果を丁寧分析することにより、各学年での基礎基本及び学び合いのできる授業展開の仮説を立て、実践し、授業改善に活かす(学力向上アクションプランと運動)。②重点研究のテーマを「主体的に関わり、課題を解決しようとする子の育成」と設定し、思考力を育てる活動を意図的に取り入れる。	①学習状況調査の分析を通して学年の弱点を強化する取組に着手することができた。学年によってはその継続が課題となり、次年度への反省点となっている。②重点研究で取り上げた『横浜の時間』及び生活科では、職員のカリキュラムマネジメントが少しずつ感じられるようになり、子どもの主体的な学習に繋がっている。	B
豊かな心	①幼、保、中及び地域の人の豊かな関わりをつくる教育活動の在り方を模索していく。②授業参観日や学校公開日に道徳の授業を行い、家庭との連携を図る。	①地域人材との交流、学習を増やしたことにより、他者意識の高まりに繋がっている。②保護者へ年1、2回の道徳の授業の公開や話題提供を行い、十分な発信ができたが、保護者との連携には課題が残り、児童の心の成長を共有するには至らない。	B
健やかな体	①安全面や体力向上を意識した体育学習をする。②委員会活動や学校保健委員会などを通して、体育・健康プランに沿った取組をする。③年間を通して週1回木曜日の中休み、職員・児童全員が校庭に出て遊び、最後の5分間は曲をかけてマラソンに取り組む。	①安全面を重視して指導計画を立て、場の設定を決定することは次年度も職員全員が意識する必要がある。②学校保健委員会を取り上げた「正しい手洗いの励行」は年間を通して続けることができた。③週1回ではあるが校内マラソンを続け、児童に自分の体を鍛える意識が高まった。児童が主体となる活動の在り方を探っていく。	B
児童・生徒指導	①全職員が「学校のきまり」を共有して、指導にあたる。これまでのきまりを見直し、全校に周知して指導にあたる。②児童代表委員会を中心に、年間を通して「あいさつ」運動をする。今よりさらに挨拶を増やす取り組みを各クラス・各委員会で出し合い、全校で取り組むようにする。教職員は、児童の挨拶への意識が高まるように支援する。	①「学校のきまり」は実態に即したもので、統一した指導ができている。②昨年よりは挨拶の意識が出てきたが、気持ちが育ったとは言えない。引き続き、様々な形で挨拶ができる児童を育てていく。	B
特別支援教育	①前期、後期に渡り、アセスメントシートを効果的に活用し、特別支援教育を充実させていく。②職員の特別支援教育に対するスキルアップのための研修を行う。	①アセスメントシートの記入は教員がその意義を感じている。どう活用し、指導に活かすのかについて、次年度も検討していく。②様々な事例研修を望む職員が多く、児童や保護者のニーズに答えようとする職員集団になりつつある。	B
地域連携	①地域コーディネーターと学校とのあり方を確認し、地域の教育力の活用方法を考える。②地域コーディネーターと連携し、地域の教育力を生かした学習指導に積極的に取り組む。③地域防災訓練に参加し、地域の一人としての自覚を育む教育を実践する。④「まち」とともに歩む学校づくり懇話会の意見や保護者アンケート等を活かした学校運営をする。	①②地域コーディネーターを活用する体制が整ったことにより、学級、クラブ等で地域の人材に協力していただけた。その有効性を職員も感じてきている。③初めて地域防災に参加し、地域の一人としての自覚を育む教育を実践できた。よりよい学習の場となるよう検討していく。④学校関係者からのご意見を活かした運営ができている。	A
いじめへの対応	①人権尊重の精神を基盤とする授業づくりを推進する。道徳教育、人権教育を通して、子どもにとっても身近な人権侵害であるいじめの問題を、子ども自身が解決できる力をつける。②児童一人ひとりの心理や特性を見出す児童理解の促進と、校内での組織的な情報共有・引き継ぎの徹底を図る。当たり前のことをより確実に実施する。	①校内研修を重ね、職員の意識が高まった。子どもに伝える取り組みを組織的に行う必要がある。②個票システムを用いて、組織としての引き継ぎを実施できた。	B
人材育成・組織運営	①低中高と研究・児童指導人権・保健安全にそれぞれ人材をバランス良く配置し、組織的に支援体制を確立する。②学年や所属している校務分掌以外の組織にも目を向け、意見し、相互理解を高めていく。各組織でPDCAサイクルの手法を用いて活動する。③学校・学級運営・授業力向上など職員の各職務に応じて校内・外の研修に積極的に参加する。	①低中高とA、B部会にそれぞれ人材をバランス良く配置し、組織的に支援体制を確立する。②学年や所属している校務分掌以外の組織にも目を向け、意見し、相互理解を高めていく。各組織でPDCAサイクルの手法を用いて活動する。③学校・学級運営・授業力向上など職員の各職務に応じて校内・外の研修に積極的に参加する。	B
ブロック内相互評価後の気付き	「材」を選定し、ゲストティーチャーも有効に活用するなど、授業の質を高めている。掲示物を貼る所や黒板周りの環境を各教室で工夫し、整えられている。「あいさつ川柳大賞」の掲示から、児童会であいさつ運動に取り組んでいる体制がわかったこと、実際に廊下で出会った児童に丁寧な言葉遣いで質問されたことが重なり、児童の心の教育に力を入れていると感じた。地域の方の写真を大きく貼り出しておくことで、子どもたちも地域の方の顔を覚え、さらに身近に感じられるようになり、工夫されている。	教室全面の掲示をシンプルにするなどの、ユニバーサルデザインを意識した教室環境の大切さを改めて感じた。今後は、教室全体の環境整備にも取り組んでいく必要があると感じた。ゲストティーチャーを活用することの有用性を感じた。今後はより有効に活用できる、場面の設定方法についても考えていきたい。	
学校関係者評価	主体的に子どもを育てようという工夫を今後も先生方には続けていただきたい。マラソンを始めたこと、このような特別なことは大人になってからも記憶に残るので大変結構だと思う。挨拶をする子がまだ少ないとのことだが、学校に着いたときに校庭でボール遊びをしていた子どもたちに挨拶したら元気に挨拶が返ってきた。地域の大人たちの方から進んで挨拶をしていくことも大事だ。小菅ヶ谷コンサートなど保護者だけでなく地域住民にも公開してくれと嬉しい。まち懇等を通して地域の子ども、大人との関係づくりを今後も大事にしていけるとよい。	いじめ防止基本方針についての説明を受け、地域も声かけやボランティア活動を通して支援していきたいと考えている。深刻ないじめになる前に気付いて、学校や家庭と情報を共有し、子どもたちの健全育成に努めていきたい。地域では、大人の方から挨拶をするよう話している。学校の先生の多忙な実態が問題となっているが、本来の仕事に専念できるよう、保護者や地域が協力できることをやっていこうとするという。いじめへの対応については、学校いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、未然防止と早期発見・事案対処に努めていきたい。特別支援教育の充実を図り、一人ひとりのニーズに応える学校環境づくりを目指していきたい。	

学校経営中期取組目標振り返り	本年度は、確かな学力が身につくよう主体的な学びの姿を追い求めてきた。指導者側にも、その意識が少しずつ浸透し、子どもたちの学び姿勢や他との関わり方にも表れ、地域の学習材にも目を向けるなど学習の場が広がる効果が見られている。と同時に地域と関わる場面も増え、豊かな心を育てる一助にもなっている。学習、行事での地域連携の深まりも見えつつある。特別支援教育については、教職員の意識を高めることはできたが、実践的な対応力より高められることが求められる。体力向上のための実践は定着化されてきており、今後も計画的に取り組んでいきたい。
----------------	---

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①市学状の結果を丁寧分析し、各学年で基礎・基本の定着を図る具体的方策を立て(学力向上アクションと運動)、継続的に実践するとともに、個々の児童への支援には、改善が必要である。②総合的な学習の時間や生活科の学習を中心に、体験活動、話し合い活動を積極的に取り入れ、授業改善を進めた。	①学習状況調査の分析を通して学年の弱点を強化する取組をすることができた。②重点研究のテーマ「豊かな心」を軸として、身に付けさせたい資質・能力を明確にして繰り返し言語活動を繰り返し行うことで、思いを豊かに表現できるように授業改善を進めていく。③各担任の強みを生かし、学年全体で学力を向上させるために教科担任による授業を進めていく。	B
豊かな心	①授業参観や学校公開日に道徳の授業を行い、懇談会等でねらいをはっきりさせて家庭との連携を図る。②自他を大切にすることを育むための、異校種交流やたてわり活動(いちょう活動)を計画的に実施する。	①道徳の授業の公開や話題提供を行ったが、保護者との連携にはまだ課題が残った。②たてわり活動を計画的、継続的に行うことにより、様々な場面でより多くの異学年交流が見られるようになった。	A
健やかな体	①安全面や体力向上を意識した体育学習をする。②委員会活動や学校保健委員会などを通して、体育・健康プランに沿った取組をする。③年間を通して週1回木曜日の中休み、職員・児童全員が校庭に出て遊び、最後の5分間は曲をかけて児童主体型のマラソンに取り組む。④食に対する関心を高める指導をする。	①体力向上を意識した体育学習をすることができた。②学校保健委員会が掃除について話し合うことを通し、衛生へ関心を高めた。③委員会の児童が中心となるRUNRUNタイムは定着してきた。より体力の向上につながるような活動にしていける必要がある。④栄養士による指導や、給食委員会の活動などを通して食への関心を高めた。	B
児童・生徒指導	①全職員が「学校の決まり」「共通指導事項」を見直し、全校に周知して指導に当たる。②児童代表委員会を中心に、年間を通して「あいさつ」運動をする。あいさつを増やす取り組みを各委員会で出し合い、各学級で取り組むようにする。教職員は、児童の意識が高まるよう支援するとともに、保護者との連携を図る。	①職員の共通理解に難しさを感じる場面があった。②子供にあいさつをしようとする気持ちが見られるようになった。	B
特別支援教育	①ユニバーサルデザインの視点からわかる授業の工夫や、発達障害について特性を理解するための事例などの研修を行う。②一人ひとりのニーズに応じた個別の指導計画を作成し活用していく。	①効果的な研修を重ね、特性の理解につながった。ここから授業に生かすところを組織的に取り組むとさらに良かった。②指導計画を見直し、指導に生かすことができた。	B
地域連携	①地域コーディネーターと連携しながら、地域の教育力を活かした学習指導に積極的に取り組む。②地域防災訓練に参加し、地域の一人としての自覚を育む教育を実践する。③「まち」とともに歩む学校づくり懇話会の意見や保護者アンケート等を活かした学校運営をする。	①積極的に地域コーディネーターと連携し、より多くの場面で、地域の教育力を活用することができた。②地域防災訓練や総合学習を通して、地域の一人としての思いが芽生えてきた。③学校関係者からのご意見を活かした運営ができている。	A
いじめへの対応	①人権尊重の精神を基盤とする授業づくりを推進する。道徳教育、人権教育を通して、子どもにとっても身近な人権侵害であるいじめの問題を、子ども自身が解決できる力をつける。②児童一人ひとりの心理や特性を見出す児童理解の促進と、校内での組織的な情報共有・引き継ぎの徹底を図る。当たり前のことをより確実に実施する。	①校内研修を重ね、職員の意識が高まった。子どもに伝える取り組みを組織的に行う必要がある。②個票システムを用いて、組織としての引き継ぎを実施できた。	B
人材育成・組織運営	①低中高とA、B部会にそれぞれ人材をバランス良く配置し、組織的に支援体制を確立する。②学年や所属している校務分掌以外の組織にも目を向け、意見し、相互理解を高めていく。各組織でPDCAサイクルの手法を用いて活動する。③学校・学級運営・授業力向上など職員の各職務に応じて校内・外の研修に積極的に参加する。	①低中高ブロックや各組織でそれぞれが協力して活動できた。②各行事や学校経営計画反省の場などで積極的に意見を出し合った。③各職員が必要な研修に積極的に参加した。	A
ブロック内相互評価後の気付き	教室全面の掲示をシンプルにするなどの、ユニバーサルデザインを意識した教室環境の大切さを改めて感じた。今後は、教室全体の環境整備にも取り組んでいく必要があると感じた。ゲストティーチャーを活用することの有用性を感じた。今後はより有効に活用できる、場面の設定方法についても考えていきたい。	個に合わせた授業が進められていること、どの子どもも安心して学習できるような工夫がされていることなどを評価してもらった。また地域の力を活用して活動することの大切さを改めて感じた。また、子どもたちが挨拶がしっかりとできていてと評価していただいた、年間を通して子どもたちにより効果的に意識づけしていく方法を模索していきたい。	
学校関係者評価	いじめ防止基本方針についての説明を受け、地域も声かけやボランティア活動を通して支援していきたいと考えている。深刻ないじめになる前に気付いて、学校や家庭と情報を共有し、子どもたちの健全育成に努めていきたい。地域では、大人の方から挨拶をするよう話している。学校の先生の多忙な実態が問題となっているが、本来の仕事に専念できるよう、保護者や地域が協力できることをやっていこうとするという。いじめへの対応については、学校いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、未然防止と早期発見・事案対処に努めていきたい。特別支援教育の充実を図り、一人ひとりのニーズに応える学校環境づくりを目指していきたい。	子どもたちは、大人が思っている以上に携帯・スマホを持って使っている。これからは、持つことを禁止するより正しい使い方や危険性について教えていくことが、重要になってくる。病的な依存も懸念されるので、家庭や学校で早い時期にルールを決めることが大事である。放課後キッズクラブのとなり教室が地域交流室になり、有効活用が望まれる。学校地域家庭がチームになって、子どもたちを大事に育てていきたい。いじめ防止校内対策委員会が定期的に各学年の子どもたちの情報共有をしていることは、大事なことである。地域でも、子どもたちの様子を見守り、あいさつや声かけをして、いじめになる前に気づかせるようにしたい。	

学校経営中期取組目標振り返り	本年度は、生活・総合学習の時間を軸に、確かな学力が身につくよう主体的な学びの姿を追究し、授業改善や指導方法の工夫に努めた。積極的に地域の学習材を開発し授業づくりをする教員の姿があり、子どもたちが主体的に楽しく学ぶ姿が見られた。縦割り活動や年間通した登校班での登校など、本校が続けている活動により、思いやりのある児童が育っていることと実感している。体験や本物との出会いを大事にし、豊かな心の育成に努めていきたい。いじめへの対応については、学校いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、未然防止と早期発見・事案対処に努めていきたい。特別支援教育の充実を図り、一人ひとりのニーズに応える学校環境づくりを目指していきたい。
----------------	---

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①市学習状況調査の結果を分析することにより、各学年で基礎・基本の定着を図る具体的方策を立て、継続的に実践するとともに、学年研等で改善を行っていく。②重点研究のテーマ「豊かな心」を軸として、身に付けさせたい資質・能力を明確にして繰り返し言語活動を繰り返し行うことで、思いを豊かに表現できるように授業改善を進めていく。③各担任の強みを生かし、学年全体で学力を向上させるために教科担任による授業を進めていく。	①学習状況調査の分析をもとに基礎・基本を定着に向けて継続的に実践できた。②国語科の学習を中心に、言語活動を積極的に取り入れ、授業改善を進めた。③高学年で、教科担任による授業を進め学年の学力向上を図った。	B
豊かな心	①授業参観や学校公開日に道徳の授業を行い、懇談会等でねらいをはっきりさせて家庭との連携を図る。②自他を大切にすることを育むための、異校種交流やたてわり活動(いちょう活動)を計画的に実施する。	①道徳の授業の公開や話題提供を行った。保護者との連携の仕方を工夫していく。②たてわり活動を計画的に行い、様々な場面で異学年交流が見られた。交流の質をより高めていく工夫が必要である。	A
健やかな体	①安全面や体力向上を意識した体育学習をする。②委員会活動や学校保健委員会などを通して、体育・健康プランに沿った取組をする。③年間を通して週1回木曜日の中休み、職員・児童全員が校庭に出て遊び、最後の5分間は曲をかけて児童主体型のマラソンに取り組む。④給食指導を通して、食に対する関心を高める指導をする。	①体力向上を意識した体育学習をすることができた。②学校保健委員会が掃除について話し合うことを通し、衛生へ関心を高めた。③RUNRUNタイムの時間をしっかり確保することによって、体力向上の意識が高まった。④栄養士による指導や、給食委員会の活動などを通して食への関心を高めた。	B
児童・生徒指導	①全職員が「学校の決まり」に基づき、全職員で一致した指導に当たる。②児童代表委員会を中心に、年間を通して「あいさつ」運動をする。今年度は、一人一人が自分から進んであいさつできることを目指す。あいさつを増やす取り組みを各委員会で出し合い、各学級で取り組むようにする。教職員は、児童の意識が高まるよう支援するとともに、保護者との連携を図る。	①学校のきまりに基づき、全職員で指導する意識が高まった。②委員会を中心に学校全体であいさつ運動に取り組んだ。普段の生活の中にも生きやすいような取り組みがさらに必要である。	B
特別支援教育	①一人ひとりのニーズに応じた個別の指導計画を作成し、活用していく。②ユニバーサルデザインの視点からわかる授業の工夫や、発達障害について特性を理解するための事例などの研修を行う。	①個別の指導計画を作成できた。短期目標のふり返りをしつとさらに活用できる。②特別支援研修やユニバーサルデザインの視点での授業研究を行い、理解が深まった。	B
地域連携	①地域コーディネーターとより連携し、地域の教育力を活かした学習指導を行う。②「まち」とともに歩む学校づくり懇話会の意見や保護者アンケート等を活かした学校運営を行う。	①積極的に地域コーディネーターと連携し、昨年のよりも多くの場面で、地域の教育力を活用することができた。②学校関係者からのご意見を活かした運営ができている。	A
いじめへの対応	①未然防止を基本とする。そのためにも、教職員一人ひとりがいじめを見抜く目をもち、学級だけにどまらず、学年や専科など、複数の大人の目で子どもたちを見ていくこととする。②児童一人ひとりの心理や特性を見出す児童理解の促進と、校内での組織的な情報共有・引き継ぎの徹底を図る。当たり前のことをより確実に実施する。	①職員が、早め早めに対応しようという意識がもてた。②いじめ防止対策委員会を活用し、校内の情報共有ができた。進級時の引き継ぎをより綿密にしていく。	A
人材育成・組織運営	①低中高とA、B部会にそれぞれ人材をバランス良く配置し、組織的に支援体制を確立する。②学年や所属している校務分掌以外の組織にも目を向け、意見し、相互理解を高めていく。各組織でPDCAサイクルの手法を用いて活動する。③学校・学級運営・授業力向上など職員の各職務に応じて校内・外の研修に積極的に参加する。	①低中高ブロックや各組織でそれぞれが協力して活動できた。②各行事や学校経営計画反省の場、メンター研などでそれぞれの立場で積極的に意見を出し合った。③各職員が必要な研修に積極的に参加した。	A
ブロック内相互評価後の気付き	個に合わせた授業が進められていること、どの子どもも安心して学習できるような工夫がされていることなどを評価してもらった。また地域の力を活用して活動することの大切さを改めて感じた。また、子どもたちが挨拶がしっかりとできていてと評価していただいた、年間を通して子どもたちにより効果的に意識づけしていく方法を模索していきたい。	子どもたちは、大人が思っている以上に携帯・スマホを持って使っている。これからは、持つことを禁止するより正しい使い方や危険性について教えていくことが、重要になってくる。病的な依存も懸念されるので、家庭や学校で早い時期にルールを決めることが大事である。放課後キッズクラブのとなり教室が地域交流室になり、有効活用が望まれる。学校地域家庭がチームになって、子どもたちを大事に育てていきたい。いじめ防止校内対策委員会が定期的に各学年の子どもたちの情報共有をしていることは、大事なことである。地域でも、子どもたちの様子を見守り、あいさつや声かけをして、いじめになる前に気づかせるようにしたい。	
学校関係者評価	いじめ防止基本方針についての説明を受け、地域も声かけやボランティア活動を通して支援していきたいと考えている。深刻ないじめになる前に気付いて、学校や家庭と情報を共有し、子どもたちの健全育成に努めていきたい。地域では、大人の方から挨拶をするよう話している。学校の先生の多忙な実態が問題となっているが、本来の仕事に専念できるよう、保護者や地域が協力できることをやっていこうとするという。いじめへの対応については、学校いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、未然防止と早期発見・事案対処に努めていきたい。特別支援教育の充実を図り、一人ひとりのニーズに応える学校環境づくりを目指していきたい。	子どもたちは、大人が思っている以上に携帯・スマホを持って使っている。これからは、持つことを禁止するより正しい使い方や危険性について教えていくことが、重要になってくる。病的な依存も懸念されるので、家庭や学校で早い時期にルールを決めることが大事である。放課後キッズクラブのとなり教室が地域交流室になり、有効活用が望まれる。学校地域家庭がチームになって、子どもたちを大事に育てていきたい。いじめ防止校内対策委員会が定期的に各学年の子どもたちの情報共有をしていることは、大事なことである。地域でも、子どもたちの様子を見守り、あいさつや声かけをして、いじめになる前に気づかせるようにしたい。	

学校経営中期取組目標振り返り	国語科の学習を中心に言語活動を積極的に取り入れ、授業改善を進めた。教科担任による授業を進め学年の学力向上を図った。職員の強みを生かしカバーしあえる学年チームづくりを推進したことで、職員が教材研究をしたり児童に向き合ったりする時間が増えた。舞台芸術等の鑑賞体験や様々な出前授業を実施することで、児童が「本物」に接する機会を増やした。その結果、子どもたちの感性や創造性の育成に大きな成果があった。教育環境整備・危機管理の視点から様々な修繕・工事を実施し、また、地域の方や保護者による畑や花壇の整備・学習ボランティアが積極的に行われ、安全で安心できる学校づくりを進めることができた。
----------------	--